

平成 22 年 9 月 28 日

## 平成 22 年におけるこれまでの防災ボランティア活動について

### 1. 平成 22 年梅雨前線による大雨における防災ボランティア活動

#### (1) 大雨の概況

6 月中旬から 7 月中旬にかけて、梅雨前線は九州から本州付近に停滞し、断続的に活動が活発となった。九州から東北地方にかけての広い範囲で大雨となり、局地的に 1 時間に 80 ミリを超える猛烈な雨が観測された。特に九州南部ではこの間の総雨量が 1,500 ミリから 2,000 ミリに達し、平年の 2 倍を超える雨量となった。

(参考：平成 22 年梅雨前線による大雨の被害状況等について 平成 22 年 9 月 9 日内閣府)

#### (2) 災害ボランティアセンター等の設置状況等の概況

##### ○広島県

- ・世羅町：世羅町災害ボランティアセンター（7 月 15～23 日） のべ 191 人活動
  - ・庄原市：7.16 豪雨災害ボランティアセンター（7 月 18～8 月 2 日） のべ 377 人活動
- ※呉市社会福祉協議会では、「近隣の助け合いで対応しており、ボランティアの募集を行っていない」との情報を公開

##### ○山口県

- ・美祢市：7.15 美祢市豪雨災害ボランティアセンター（7 月 16～30 日） のべ 647 人活動
- ・山陽小野田市：山陽災害ボランティアセンター（7 月 17～22 日） のべ 2,261 人活動

##### ○岐阜県

- ・可児市：災害ボランティアセンターは設置せず活動（7 月 17・18 日） のべ 25 人活動

#### (3) 災害ボランティアセンターが設置された市町における住家被害の概況

	全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
広島県世羅町		3	1	3	10
広島県庄原市	12	12	6	1	30
山口県美祢市	2	19	9	105	181
山口県山陽小野田市		8		441	355
岐阜県可児市				113	150

広島県災害復旧対策本部・参考資料より抜粋 9 月 8 日時点の被害状況

山口県緊急災害情報のページより抜粋 9 月 8 日時点の被害状況

可児市防災情報のページより抜粋 7 月 30 日時点の被害状況

## (4) 今回の防災ボランティア活動の特徴や課題等について (山陽小野田市)

---

### ○災害ボランティアセンターに関すること

- ・地元社協職員 (山陽小野田市社会福祉協議会) が中心になって運営を行った。
- ・県社協が県下の社協と調整し、周辺市町社協が運営支援の職員を派遣した。
- ・日本看護協会のナース 4 名が救護支援のため常駐していた (県支部からの派遣と思われる)。活動エリアを巡回し、活動状況の把握を行ったり、熱中症やけがなどに関する注意喚起を行うなど手厚い内容の安全衛生面の支援を行った。
- ・現地のボランティア活動からセンターに戻った際、靴の消毒、石鹸での手洗い、アルコールによる消毒、うがい薬によるうがいを徹底していた。昨年の防府市での教訓が活かされていた点といえる。

### ○おしぼり隊によるニーズ把握の実施について

- ・被災者の作業をお手伝いのため、またニーズ把握を行うために、24 日から、泥だしなどの作業だけではなく、被災者へおしぼりの配布をはじめた。一輪車におしぼりやお茶、氷砂糖を乗せ、被災者に配りながら、新たなボランティアのニーズを聞きとりや、罹災証明等の案内を行った。ボランティアを受け入れている被災者だけでなく、ボランティアのお手伝いをしてもらっていない被災者へ対しても声掛けが行われた。

### ○地元組織によるボランティア活動について

- ・地元青年会議所 (小野田市青年会議所) が市役所庁舎の一室に「対策本部」を設置し、被災者の支援を行った (7 月 17 日 (土) ~7 月 19 日 (祝))
- ・高校生 (小野田高校サッカー部や小野田工業高校の情報課等) が、担当教諭の発案でボランティア活動を行った。高校生が参加することで、災害ボランティアセンターや現場の雰囲気よくなった。

### ○被災地外からの支援活動について

- ・宇部市では地元 FM を通じて、ボランティア活動に必要な装備や場所など具体的な情報が提供された。
- ・NPO 法人レスキューストックヤードから資機材の支援があった。

【参考：各災害ボランティアセンター等での活動人数】

		7.16 豪雨災害 ボランティア センター (庄原市)	世羅町 災害ボラン ティアセン ター	山陽災害ボラン ティアセン ター (山陽小野田市)	7.15 美祢市豪雨 災害ボラン ティアセン ター	可児市 (セン ター未 設置)
7.15	木		15			
7.16	金		23			
7.17	土		22	105	105	6
7.18	日		30	496	126	19
7.19	月		45	296	104	
7.20	火		25	112	65	
7.21	水	5	14	96	122	
7.22	木	16	11	161	125	
7.23	金		6	220		
7.24	土	63		221		
7.25	日	65		130		
7.26	月	17		136		
7.27	火	21		108		
7.28	水			103		
7.29	木	32		34		
7.30	金	19		43		
7.31	土	82				
8.1	日	49				
8.2	月	8				
8.3	火					
8.4	水					
8.5	木					
合計		<b>377</b>	<b>191</b>	<b>2261</b>	<b>647</b>	<b>25</b>

5市町のべ2,933人

【参考：山陽小野田市における防災ボランティア活動の様子】



災害ボランティアセンターの受付の様子



災害ボランティアセンターに揃えられた資機材



活動依頼のあった現地に向かうボランティア  
(弘中秀治氏提供)



屋内でのボランティア活動の様子  
(弘中秀治氏提供)



屋外でのボランティア活動の様子



被災者のニーズ掘り起こしのために行われた  
「おしぼり隊」の訪問活動

## 2. 平成 22 年台風第 9 号に伴う大雨における防災ボランティア活動

### (1) 災害ボランティア活動の概況

#### ○静岡県

- ・小山町：小山町災害ボランティア本部（9月10～19日）のべ1,690人活動（累計）
- ・小山町災害ボランティア本部は、9月10日に開設され、浸水被害住家の泥のかきだしや掃除、ゴミ出し、引越手伝い等の活動が行われた。
- ・小山町災害ボランティア本部の運営については、県社協から2名、市町社協から2～4名が派遣され、連日支援が行われた。また、静岡県ボランティア協会から職員派遣による支援も行われた。NPO法人レスキューストックヤードから資機材の支援があった。
- ・小山町災害ボランティア本部では、被災者及び被災世帯からの要請に対し、約1,700名のボランティアの調整が行われ、これらへの対応もほぼ完了したことから、9月19日（日）をもって、小山町災害ボランティア本部としての活動は終了。
- ・今後の要望については、『小山町社会福祉協議会ボランティアセンター』が引き継ぎ対応していく予定。

#### <小山町災害ボランティア本部の活動>

9月11日（土）	292名
9月12日（日）	547名
9月13日（月）	19名
9月14日（火）	263名（小山中学校関係者含む）
9月15日（水）	41名
9月16日（木）	42名 ※雨天のため訪問によるニーズ調査が中心
9月17日（金）	49名
9月18日（土）	273名
9月19日（日）	164名（他、自衛隊47名）

#### <小山町社協ボランティアセンターの活動>

9月20日（月・祝） 58名

### (2) 災害ボランティアセンターが設置された市町における住家被害の概況

	全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
静岡県小山町	6	3	—	54	87

静岡県報道提供資料より抜粋 9月24日時点の被害状況

## 災害ボランティアセンターの点検

### 山陽小野田市の位置

- 山陽小野田市は、山口県の南西部、周防灘に面した人口6万6千人の地方小都市。市域に厚狭川、有帆川と二つの大きな川が流れ、市街地は、海を埋め立てた干拓地、湿地帯に用水路を整備した低地に発達している。

### 今回の災害

- 厚狭川の上流美祢市域で、降り始めから600ミリ弱の集中豪雨があり、その雨が一気に厚狭川に流れ込んだため、厚狭川の平常時水位0.9m、氾濫危険水位5.7mを超え最大水位が6.41mに達し、7月15日午前には堤防を越えて氾濫、新幹線駅のある厚狭の街中に洪水をもたらした。
- 幸い、日中であったため、死者等はでなかったが、住居のみで、半壊8棟、床上浸水450世帯、床下浸水360世帯の被害が発生した。厚狭川流域では、見る間に天井まで水位が上がり、濁流に呑まれた家屋もあった。厚狭川に架かる橋が倒壊し、川と並行して走行しているJR美祢線は、鉄橋の橋脚基礎から破壊される等、壊滅的被害を受け、未だ復旧の目途は立っていない状況である。

### 初めての災害ボランティアセンター立ち上げ

- 災害発生と同時に、社会福祉協議会としては、介護事業利用者の救出に向かい、職員が利用者を背負って避難所に避難させるとともに、災害ボランティアセンター設置の協議を行政に申し入れた。
- 翌朝一番に行政と協議し、災害ボランティアセンター設置を決定した。初めての災害ボランティアセンターの立ち上げではあったが、全社協、県社協、市町社協、レスキューズトラックヤード、神戸や新潟等災害経験地域のNPO等、多くの方々のアドバイスをいただき、何とか立ち上げることができた。

## 災害ボランティアセンターのスタッフ編成と活動報告

### ○センター組織

セ	副センター長	総務班(会計、記録、広報、ニーズ受付等)
ン		受付班(ボランティアさん受付、終了時の消毒、飲物配布等)
タ		マッチング班(ニーズとボランティアさん派遣の調整)
―	副センター長	物資班(物資・資材の調達・配布、ボランティアさん輸送等)
長		救護班(ボランティアさんの安全衛生、健康管理等)

○災害ボランティアセンターでは、開所期間中(平成22年7月17日から7月30日まで)、495件のニーズに対して、2473人のボランティアを派遣し、飲料水の確保、床下の汚泥の除去、家具や畳の移動、ごみの搬出等の作業を行った。

### 班別反省点および感じたこと等

#### ◎ 総務班

- 会計、記録、広報班とニーズ受付班は別々の班にすべきであった。また、ニーズの受付で電話だけでは状況がわからない案件は、すぐに調査できる実地調査班の必要性を感じた。
- 災害ボランティアの立ち上げ当初、支援内容等を記載したチラシを作成し、地区社協の役員の方々に協力してもらって、被災地域全域に配布できたので、情報の徹底ができた。
- ニーズ等の受付は、聞き取り項目等を担当スタッフで協議し、最初に電話対応マニュアルを作成したので、スタッフが変わっても同じ対応ができたことは良かった。
- ニーズ受付は、災害ボランティアセンター立ち上げの趣旨を基本に、支援の対応範囲を明確にしておく必要があることを感じた。現地で被災者から「ついでにこれもやってちょうだい」と頼まれ、ボランティアさんでは断れないとか、ボランティアさんとしてはせっかく来たのだから、被災者に喜んでいただけるように「何でもしますよ」と言われる等の状況があり、「隣の家は対応範囲以外のこともしてもらっているのに、何故うちの家はしてもらえないのか」というような混乱も生じた。
- 毎日、センター閉鎖後スタッフ全員で反省会を開いたことにより、日々課題の整理改善、班連携が緊密になり、時間の経過とともに円滑にセンターを運営することができた。

#### ◎ 受付班

- 当初、活動を終えられたボランティアさんが帰って来られたときの、消毒等の手順を看護協会に指導を受け、順調に運営できた。また、帰還時に冷たいお絞りを渡して喜ばれた。

## ◎ マッチング班

- 当初はボランティアさんも、ニーズも多いので、マッチングをしてどんどん派遣すれば良かったが、終わりに近づくにつれてボランティアさんは多いのにニーズがあがってこない、逆にニーズは多いのにボランティアさんの参加が少ない等、調整に苦労した。
- ボランティア活動に関わる注意事項の掲示物、チラシ等を見てももらえないので、マッチング時に口頭で徹底する必要がある、途中から切り替えた。

## ◎ 物資班

- 物資班と輸送班は別々にすべきであった。
- NPO 法人レスキューストックヤードさんのアドバイスをいただき、早期に物資、機材を搬入することができ、また、県内の災害ボランティアセンター経験社協からも機材がいち早く届き、円滑な復旧活動が可能となった。

## ◎ 救護班

- 災害ボランティアセンター立ち上げ準備の段階から、県看護協会に入っただき、安全衛生、健康管理面で、多くの助言をいただき、大変助かり有難かった。
- 救護班は、センター開所期間中を通して、ボランティアさんのフォローアップに徹していただいた。特に、復興支援期間中は、猛暑が続き、炎天下汚泥除去で泥まみれになったボランティアさんの熱中症対策や、現地で昼食を摂られる場合の手洗い(当初は断水していた)、消毒、うがいの指導、冷たいお絞やマスクの配布等を実施していただいた。おかげで、連日 30 度を越す暑さの中、熱中症や怪我等の発生は最小限に抑えることができた。

## ◎ おしぼり班

- タオルが不足し、マスコミに寄付の呼びかけをしたところ、予想を上回るタオルの寄贈があり、せっかくいただいた物を有効に活用するため、開所後半途中に設置した班である。
- 被災者の方々の心のケア、ちょっと一息、ほっとして欲しい、お話を他人に聞いてもらいたいという要望がある、被災地域でありながらニーズの出ていない家のニーズ確認等のため、顔の見える地元ボランティアさんや学生さん、地元社協職員で構成したおしぼり隊を編成し、冷たいおしぼりや氷砂糖、飲物、罹災証明案内等を持ってローラー方式で被災地全域の全ての家を回った。被災者の笑顔が久しぶりに戻り、大変喜ばれた。
- この時期、中越や神戸の学生さんを中心にした足湯隊も入り、「気持ちイイー」「体が楽になった」等の声を聞くことができた。グッドタイミングであった。



## 災害ボランティアセンター閉所後の対応

- 災害から2週間が経過し、被災地の復旧状況も一段落し、またニーズやボランティア参加数も減少してきたことから、災害ボランティアセンターは、正味14日間で閉所した。
- しかし、閉所後も、社協の平常業務の中で被災者支援を引き続き実施するため、「災害復興支援センター」を設置した。8月中のニーズ受付件数は8件で、全て対応済みである。
- この災害復興支援センターの支援ボランティアさんは、センター開所時に予め募集していた登録ボランティアさん、また、できるだけ顔の見える地元ボランティアさんの支援が望ましいと考え、地区社協と連携して地元ボランティアチームを編成、派遣している。このような顔の見える支援、地元協力体制が、今後、地域の自主防災組織化、地域ボランティアの活性化に繋げることができたら、災害という不幸な出来事を「災い転じて福となす」ことができるのではないかと思っている。
- また、社協職員も平常業務に戻ったこともあり、時間を見つけては被災者宅を訪問し、傾聴ボランティアを実施している。

## その他反省点、感じたこと

- 今回初めて災害ボランティアセンターを立ち上げたが、県社協のリーダーシップ、市町社協の職員派遣等、社協間の協力体制、連携・絆の強さを改めて感じた。
- 今回の災害ボランティアセンターには、地元中学生、高校生の学生さんが多数参加され、被災者の方から大変感謝され、地域活動の素晴らしさを体験したという声が聞かれた。更に地元企業も通常業務を返上して参加していただいたことは大変心強く感じた。また各種団体の参加や若い人から高齢者まで多くの個人ボランティアさんが参加され、それぞれの能力に応じて、誰でもボランティア活動ができることを理解され、懸命に支援活動をされていた。その活動されている姿を見て、希薄になりつつある人間関係もまだまだ捨てたものではない、今回の災害は地域の一体感を醸成するという点では、良い機会になったと思われる。
- 災害ボランティアセンタースタッフとして活動した社協職員は、災害が週末に発生し、3週間休みもなく、早朝から夜遅くまで勤務した。経験者から順番に休暇を取らないといけない、と再三アドバイスをいただいたが、気が張っている精か、まだ何とか頑張れる、まだ体力は残っている、と自らを過信していた面がある。しかし、災害ボランティアセンターを閉所した後も、3週間毎日災害の夢を見て、メンタル的には相当疲労していたな、と後になって気づいた職員もいた。班毎に正副責任者を置き、交代で休みが取れる体制は是非必要であることを痛感した。
- 「センター長は、司令塔だからあちこち動かないで欲しい」とスタッフから言われていたので、当初はセンター内だけでの采配であった。しかし、災害支援経験者から、「センター長も被災復興現場を見ておいた方が良い」とアドバイスを受け、忙しい中ではあるが、できるだけ時間を作って現場を見て歩いた。現場を知ることによって、適切な指示や決断する上で有効に作用した。緊急の連絡等は、携帯電話を活用することで対応できるのであるから、非常に有意義なアドバイスであったと感謝している。

- 余裕のある職員配置をしているわけではないので、平常業務と災害ボランティアセンター業務の振り分けをどう調整していくのか、今後の課題として残った。災害ボランティアセンターの運営は、今回も地元の方々にスタッフのお願いをしたが、今後は大幅に地元住民を巻き込みスタッフとして活動してもらう方法を考える必要がある。
- 今回は大規模災害の指定を受けたことで、災害ボランティアセンター運営経費の財源は手当てしていただいたが、小規模災害でセンター設置が必要な場合は、運営費をどうするのであろうかという疑問が残った。
- 災害ボランティアセンター設置にあたっては、当初しっかり行政と協議をしておくことは勿論であるが、行政と情報を共有するためには、災害対策本部会議にセンター長が出席する必要があると感じた。途中からではあるが本部会議に出席を始めて、当初ギクシャクしていた行政との関係が改善された。
- 今回災害ボランティアセンターを立ち上げ、運営したことは、貴重な体験になったし、自信にもなった。この経験を今後の災害ボランティアセンター運営に活かしていくこと、積極的に他地域の支援に行くことで、多くの方々にお世話になった恩返しができると思う。

文責 山陽災害ボランティアセンター長 金光 康資